

# Close up だて



「待ってた食卓」公演後の影山氏とのトークショー  
(撮影協力：(有)フォーユー)

## — 伊達の良さを 観てくれる人に伝えたい —

きしだくにお  
第56回岸田國土戯曲賞受賞  
伊達市特別表彰受賞

ふじ た たか ひろ  
藤 田 貴 大さん

**伊** 達市で18年間過ごした記憶や原風景を描くことを作品を作る中で特に大切にしています」と話すのは、伊達市出身で、8月23日の市制施行40周年記念式典で初の市特別表彰を受賞した藤田貴大さん。現在、横浜市を拠点に劇団「マームとジブシー」で演出家・劇作家として活動しています。

藤田さんと演劇の出会いには、10歳で市民劇団「劇団バラム」の門を叩いたのが始まり。劇団の演出家で、当時伊達緑丘高校演劇部顧問の影山吉則氏と出会い、高校は恩師の指導を受けるため同校に進学。3年生の時に演出を担当し、作品「りんごの木」で全国大会ベスト4に残るなどの成績を残しました。

その経験を糧に進学した桜美林大学で、「現代口語演劇」の祖と言われる平田オリザ氏と出会う素質が開花、本格的に演劇の「作り手」としての歩みを始めます。

### プロフィール

- 昭和60年生まれ ■ 伊達市出身
- 2007年に劇団「マームとジブシー」を旗揚げ
- 2011年6月～8月にかけて発表した三連作「かえりの合図、まっけた食卓、そこ、きっと、しおふる世界。」で第56回岸田國土戯曲賞受賞
- 2012年8月、伊達市初となる「市特別表彰」受賞

平成19年には自ら劇団を旗揚げし、現在は幅広く活躍されています。上京してからは伊達へ帰ることがほとんどなかった藤田さん。それは、自他共に認める頑固な性格と、ふるさと伊達に対して恩返しができない今の状態で、義理を欠くようなまねはしたくないという思いがあったとのこと。

「手ぶらでは帰りたくなかった。何かを成し遂げて伊達から呼ばれて帰りたいかった」という藤田さんのもとに、カルチャーセンターでの作品上演という吉報が届いたのは昨年。伊達を舞台にした作品「待ってた食卓」の上演で帰郷することになり、本当の意味で伊達に帰れると実感したとのこと。

この作品は、帰郷時にはまだ台本が未完成のまま、カルチャーセンターでの稽古中に練り上げられながら完成・上演されたもの。まさに伊達で作られた作品になりました。

「伊達にこだわり、伊達の地で作品を作り上げ上演できたことが、今まで演劇に携わってきた中で何よりも大きかった。演劇をやってきて良かったと思いました」

その作品が評価され、今春「第56回岸田國土戯曲賞」を受賞。過去の受賞者には野田秀樹氏、三谷幸喜氏など現在の演劇界を代表する錚々たるメンバーが揃っています。「偉大な先輩方が成し得なかったことをしたい」という藤田さんの挑戦は、これから始まります。

## 楽 画 記

- 旅先で小1の愛娘の前歯3本が乳歯から永久歯への生え変わりを迎えて「グラグラ」…。場所が場所だけに食事を摂るのも大変そう。見かねた妻が前歯を直接掴んで引き抜く荒技を敢行!でも抜けない…激痛に泣きわめく娘!最後はコンビニで購入した刺繍糸で僕が一撃。よい子は真似しないように(じ)
- ある取材先で「私、雨女なんです」と話している女性が一人。確かにその日も雨。けれど思い返してみれば、私が取材で外に出る日も天気の良い時が多く、予報に反して大雨に当たったことも度々。その取材が終わってその場を離れたら雨が止んで急に青空が広がったのは偶然?それとも…。(よ)
- 隣市のお祭りに行きました。多くの露店とそれを楽しむたくさんの方々。そんな中、脚立を担ぎカメラ片手に祭りの様子を撮影している同業者(?)を発見。汗を流しながら孤独にシャッターを切るその姿に「いつもこんなに大変なのか」と上のふたりを重ね見ました。毎度の取材お疲れさまです。(や)

## だて

発行・編集 伊達市企画財政部企画課  
☎ 0142-23-3331 内線238・239  
FAX 0142-23-4414  
✉ kouhou@city.date.hokkaido.jp  
〒052-0024 北海道伊達市鹿島町20番地1

とじて保存しよう